記　録　麻布大学雑誌　第 28 巻　45－56

須田修氏遺品寄贈の記録

A Record of the Donation of Dr. Shu Suda's Mementoes to the Life Museum of Azabu University

高槻　成紀 [1]，金子　倫子 [2]

[1] 麻布大学いのちの博物館 ,
[2] 群馬県伊勢崎市在住

Seiki TAKATSUKI[1], Michiko KANEKO[2]

[1]The Life Museum of Azabu University, 1-17-71 Fuchinobe
Chuo-ku, Sagamihara, Kanagawa 252-5201, Japan
[2]Isezaki City, Gunma Prefecture

Abstract: Mrs. Michiko Kaneko, granddaughter of Dr. Shu Suda, who graduated from the original Azabu University in 1908, donated his belongings in June, 2016 to the Life Museum of Azabu University. This record introduces the correspondence between Mrs. Kaneko and Dr. Seiki Takatsuki, the senior curator of the museum, in which the authenticity and the background of the mementoes are discussed. The mementoes include some old veterinary instruments, classic books, and certified documents. A proposal to Gunma Prefecture by Dr. Suda's father to establish a new pasturing company in 1878, and Dr. Suda's favorite book "Horse's Dream" are also included. The book describes a horse's opinion to oppose the movement for horse breeding for military objectives.
Key words: Donation, Life Museum of Azabu University, Memento, Shu Suda, Veteran Veterinarian

要約：群馬県出身で明治 41 年卒業の須田修氏の遺品が麻布大学いのちの博物館に寄贈された。寄贈した金子氏と博物館の学芸員の高槻が遺品の価値や背景についておこなった文通を紹介した。遺品には当時の獣医の治療具などや証書類があった。また修氏の父が群馬県に提出した牧場の建設願いなども紹介した。

2015 年 9 月に開館した麻布大学いのちの博物館は展示活動を進める傍ら、資料の収集整理もおこなうこととし、具体的な作業として卒業生の資料寄贈に力を入れることになった。そのひとつの例として明治 41 年卒業の須田修（しゅう）氏の遺品がある。この遺品は新規収蔵展示をおこなったが、その受領から展示に至る経緯は記録する価値があると思われるので、ここに残しておくことにした。

2016 年 5 月 10 日に同窓会に金子倫子氏から、祖父須田修氏の遺品寄贈願いがあり、麻布大学いのちの博物館に伝えられた。以下はその内容である。

［金子より同窓会へ、2016 年 5 月 10 日］

突然のメール、お許しください。私は貴校の「麻布獣医学校」時代の卒業生の須田修の孫です。過日、実家の解体に際し、祖父の遺品が出てまいりました。貴校に直接関連の教科書とともに、個人的な遺品もございました。これらは、百十年前の卒業生の社会的関わりでもあろうかと考えますと、お許しいただけましたら寄贈を…と思い、お伺いのメールをさせていただきました。

記

☆麻布獣医学校第 12 寄宿舎生徒（12 名）写真（明治 40 年 1 月 19 日撮影）
☆同群馬県人生徒（14 名）写真。
☆家畜醫範．薬物学一、巻七．明治 20 年、農商務局蔵版
☆家畜医院開業時（大正初期）の診察用具一式（注射針、薬秤、メス等と薬タンス）
☆証書６枚。「蹄鉄工免状」「馬匹去勢練習生命令書」「陸軍三等獣醫として協議委員への推薦証」「養豚、養鶏の講習修了書」等々。

以上でございますが、ご検討くださいましたら幸せでございます。

これを受けて本館では寄贈を受けることとし 6 月中旬に受領した。高槻が点検し、記念写真は明治 40 年撮影であり、これまで本学所蔵の最古の写真である明治 43 年の写真よりも古いこと、秤は鼈甲製、桐箱入りの貴重なものであることなどを確認し、新規収蔵展として紹介すべきであると判断した。

その後 7 月 18 日に企画委員会でこの件を諮り、展示をおこなうこととした。

学生時代記念撮影（明治 40 年 1 月 20 日）

寮生と記念撮影（明治 40 年 1 月 20 日）

陸軍中尉就任時（大正７年または８年撮影）

獣医治療具

馬用打診器，巻尺，検蹄器

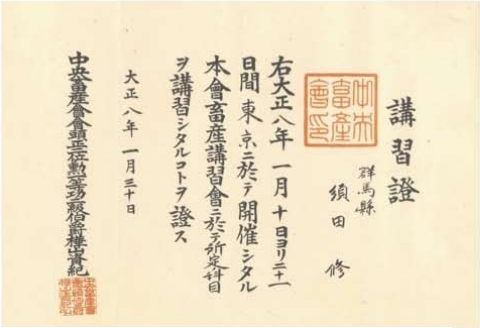
拍車

携帯用獣医治療具

注射器類

薬秤ケース（桐製）

薬秤ケース（皿は鼈甲製）


講習證
群馬縣
須田　修
右大正八年一月十日ヨリ二十一日間東京ニ於テ開催シタル本會畜産講習會ニ於テ所定科目ヲ講習シタルコトヲ證ス
大正八年一月三十日
中央畜産會會長子爵蜂須賀茂韶

蹄鐵工免状（明治 43 年）

群馬縣平民
須田　修
馬匹去勢術練習生ヲ命ス
但修業期中手當トシテ一箇月金貳拾圓ヲ給ス
明治四十四年二月十八日
馬政局

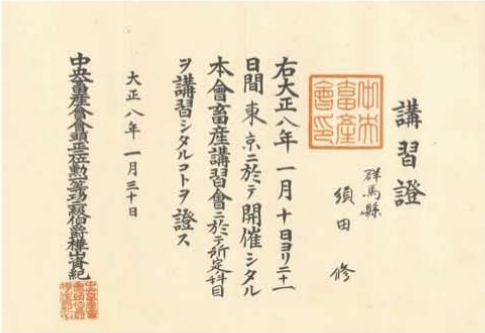
去勢術練習生命（明治 44 年）

陸軍三等獸醫須田修殿
本會協議員ニ推薦ス
大正五年七月三十一日
帝國在郷軍人會桐生町分會

帝國在郷軍人會桐生町分會（明治 44 年）

講習證
群馬縣産馬畜産組合
技手　須田　修
右者大正七年一月二十九日ヨリ五日間群馬縣ニ於テ開催シタル本會畜産講習會ニ於テ養豚及養鶏ヲ講習シタルコトヲ證ス
大正七年二月二日
中央畜産會會長子爵蜂須賀茂韶

講習証明（大正 7 年）


講習證
群馬縣
須田　修
右大正八年一月十日ヨリ二十一日間東京ニ於テ開催シタル本會畜産講習會ニ於テ所定科目ヲ講習シタルコトヲ證ス
大正八年一月三十日
中央畜産會會長子爵蜂須賀茂韶

講習証明（大正 8 年）

教科書「家畜醫範．薬物学一，巻 7」
明治 20 年，農務局蔵版

展示では証書類、教科書などは褪色の懸念があるため、コピーを紹介することとし、獣医器具類は覗きケースで紹介することとした。これを受けて 7 月 21 日に高槻より金子氏に以下の連絡をした。

［高槻より金子へ、2016 年 7 月 21 日］

金子様

麻布大学いのちの博物館の高槻と申します。この度は須田先輩の御遺品を御寄贈いただきましてまことにありがとうございました。近いうちに簡易ではありますが、紹介展示をするつもりです。

展示のために須田修先輩について紹介したいと思いますので、できるだけ詳細な情報をお知らせいただきたく思います。とくに卒業後、開業医をされたこと、当時どのような動物のどのような治療をされたかなどを知りたいと思います。またもしお聞きでしたら、学生時代の思い出、戦争中の体験（従軍されたのでしょうか）などのお話があればお聞かせください。

御遺品には私ども（私は理学部出身です）にはわか

らないものもあるので、獣医関係の先輩にもお聞きするつもりでおります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

これに対して同日に金子氏から以下の返事があった。

［金子より高槻へ、2016 年 7 月 21 日］

高槻先生

須田修・遺族の金子倫子です。この度は遺品寄贈を受け入れて頂きまして、本当にありがとうございます。

須田修は戸主・又八郎の四男として、明治 18 年 8 月 10 日に生まれ。大正 6 年に戸主・小渕利平、次女「ひやく」と結婚。軍医としての「修」は、大正 9 年 12 月 31 日、軍より「軍馬が産気づいたので出勤するように」との連絡を受け、あいにく、風邪でふせっておりましたが出掛けました。が、その馬が思いのほか難産で、火の気のない厩舎で年を越し翌日の元旦に帰宅。床に就いたのですが、翌日、大正 10 年 1 月 2 日に急性肺炎のため死去。37 歳でした。

そんなわけで、軍医としての経歴は不明です。

余談ですが、修は結婚して 4 年、子宝に恵まれませんでした。やっと恵まれた子宝がまだ妻の胎内にあるうちに修は死去。5 か月後に女の子が生まれます。それが私の母・修子です。互いの顔を見ることがかなわなかった父娘ですね。

ただ、修がなぜ獣医師になったのかを知りたくて、修の「除籍謄本」を採りました。ここからは私の憶測入りですが…

修の父親（嘉永 1 年、1849 年生）は明治 11 年に赤城山山麓（旧群馬県勢多郡）に点在する 12 の牧場主を株主とした『赤城産馬会社』を起業しています。この会社を起業するにあたって、当時の県令・楫取素彦（かとり）に提出した書類 4 点も残っていましたので群馬県立古文書館に寄贈しました。

産馬会社の社長としては、多くの馬や家畜を扱う獣医師が必要と考え、6 人の息子のなかで、勉強が好きそうな四男・修を獣医に…。卒業後は赤城山麓の村「旧勢多郡大胡」に開業させたのでしょうか。

開業の事実を知ったのは今回の遺品整理で見つけた、医事器具を入れた桐箱に「家畜獣医院」の記載を見たことによります。

なんせ、92 歳で逝った修子でさえ、直接父親から聞かされたわけではなく妻だった母からの口伝、それを孫の私が聞いた話ですので、お役にたてますかどうかおぼつきません。よろしくお願い致します。

このあと博物館から金子氏に『「ことば」に読み取る、麻布大学の歴史』を進呈した。これに対して礼状が来た。

［金子より高槻へ、2016 年 7 月 29 日受］

高槻先生

『「ことば」に読み取る、麻布大学の歴史』をありがとうございました。「アレ、高槻先生ってたしか理学博士のはずなのに」と、その守備範囲の広さと深さに感服です。

「温故知新」の「温」、当たり前のように「たずねて」と読み、それが「訪」なのか「尋」なのか考えもしなかった指摘でした。先生が「古いことに愛情を持って振り返る、ということであろう」、続いて「歴史を知ることは過去を振り返って懐かしむことではない。先人の精神の意味を考え、引き継いでいきたいものである」と記されておられるのを拝読し、博物館運営に携わる先生の矜持が伝わって参りました。

「古川橋時代」はとくに興味深く拝読しました。「家畜醫範」や「病理学ノート」の写真をみて祖父のノートが残っていたら見たかったと思いました。

「校舎は百十坪の平屋建てで二百坪の校庭を隔てて平屋校舎が 3 棟。校門付近には 15 ほどの寄宿舎があり・・・（平野栄司氏）」。学友と共に写真に写る祖父が寄宿していた東寮もこの中の一寮だったのだろうかと、そのマップ図を想像たくましく致しました。

同じく平野氏の記述で「品川に遊びに行っていて云々」には、苦労なしに育った祖父も同類だったかなど、祖父には叱られそうですが、そんなことを思ったりもしました。

「元馬医の家ではゴミとして捨てられている現実」の記載に、確かに我が家でもその寸前だったなあと思いました。さらには先生の展示文の一節に「弟の実家から確保」という文言がございましたが、「確保」ということばに込められた先生のご心情をこの冊子を拝読し、納得いたしました。

「一つ一つの小石のような記述が積み重なって立ち上がり、会ったこともない中村先生の像が浮かび上がって、その声が聞こえるような錯覚を覚えた」の一節はそのまま現在の私の心情です。

ゴミとして捨てられても不思議ではなかった遺品が麻布大学いのちの博物館の高槻先生はじめ諸先生、スタッフの方々からいただくご指導、ご厚情を通して須田修の人生が動き出すような思いがいたしました。

生まれ育った赤城山麓から単身東京に学び、卒業後も進取の精神で学び続けたにもかかわらず、わずか 14 年で獣医師生活に終止符を打った無念さに思いが至りますと、尊敬と憐憫の念を禁じ得ません。また、女性として考えたとき、風邪気味だったとはいえ、いつものように家を出て、その二日後には永遠の別れをしてしまった「ひやく」、しかも身重の身で。もし、私だったらと思いますと、絶句いたします。生前の祖母は気の強い人でしたが、さもありなんです。

昨日、この度の報告を兼ねて墓参りをしてまいりました。思いがけなく祖父の母校の歴史に触れさせていただき感謝です。ありがとうございました。

また 7 月 25 日に須田修氏のご尊父が群馬県に提出した牧場の設立願いの写しを受領したので次の連絡をした。

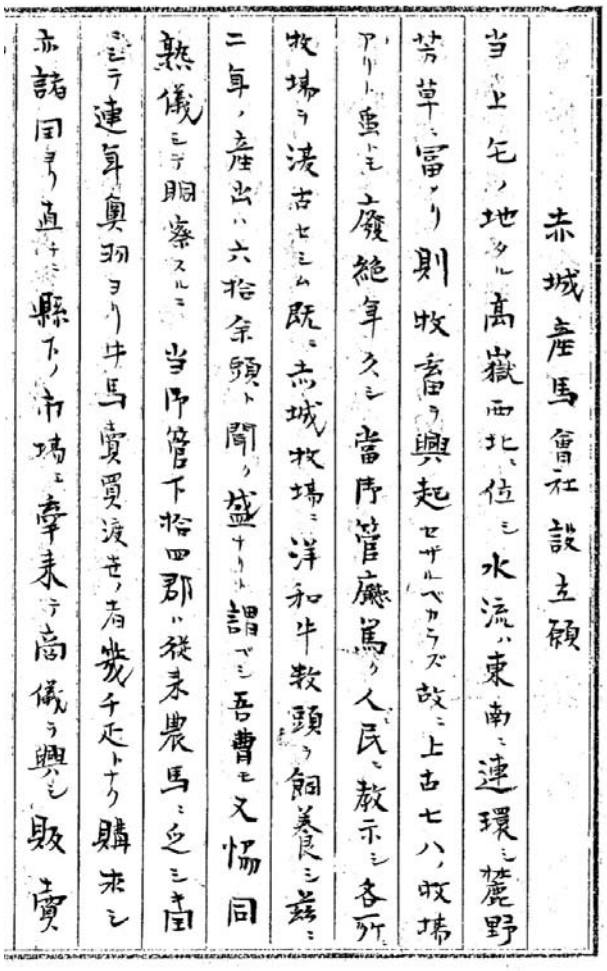
［高槻より金子へ、2016 年 7 月 26 日］

金子様

牧場設立の申請書類を拝受しました。非常に価値があるとみました。あの楫取素彦県令あての書類なのですね。文章としても味わいのあるもので、いま読み下しています。

ありがとうございました。

その後、「設立願」を読み下し、送付した（資料 1 参照）。


赤城産馬會社設立願

当上毛ノ地タル高嶽西北ニ位シ水流ハ東南ニ連環シ麓野
芳草ニ富ミ則牧畜ヲ興起セザルベカラズ故ニ上古七八ノ牧場
アリト雖モ廢絶年久シ當所管廳萬ノ人民ニ教示シ各所
牧場ヲ復古セシム既ニ赤城牧場ニ洋和牛數頭ヲ飼養シ茲
二年ノ産出ハ六拾余頭ト聞ク盛ナリト謂ベシ吾輩モ又協同
熟議シテ賜察スルニ当所管下拾四郡ハ從来農馬ニ乏シキ国
ニシテ連年奥羽ヨリ牛馬賣買渡世者幾千疋トナク購来シ
赤諸国ヨリ直チニ縣下ノ市場ニ牽来テ商儀ヲ興シ販賣

資料 1　「設立願」の手書き原文の第 1 ページ

赤城産馬會社設立願（大意現代語訳）

ここ上毛（かみのげ）は高い山が北西にあり、水流が南東に連なり、山麓には香りのよい草が豊かです。これは牧畜を起こすべき土地です。このため古くから七、八の牧場がありましたが、なくなって長い時間がたちます。群馬県の役人が農民に牧場を作るよう指導し、各所に牧場を回復させてきました。すでに赤城牧場に洋牛、和牛を数頭飼育してこの二年は六〇頭が生まれたと聞きます。盛んだというべきです。

我々も一緒によく考えてみましたが、群馬県の十四郡はもともと馬が乏しい土地であるため、長年奥羽地方から牛馬売買を渡世とする者［から］何千頭も買い求め、各地から牛馬を連れて来て県下の市場で商売をしていますが、なかなか各農家

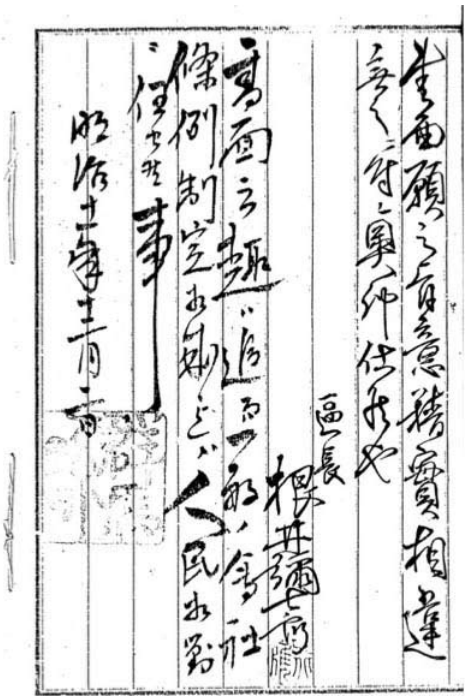
には行きわたりません。牛馬は高価であるため、いくら欲しいと願っても買うことができません。こういうことでは、いつまで経っても家産を起こすことはできません。ついには良い田圃も荒れてしまい、貧弱な稲、豆、麦を耕し、国益をだんだん衰え、桑や茶も同様です。実に貧民は哀れなことです。

限られたお金を大金に換えるためには、産馬規則に従い、雌馬を三年貸して、生まれた雌雄の馬で田圃を耕し、貨物を運搬し、人々の労力を助け、各農家に数頭の馬が飼えるようになれば、国が豊かになる基礎になります。生産に留意して、末広がりに繁盛するようにし、この会社を盛り上げ、よい馬を産ませ、人の日常に役立て、ひたすら協力しますので、十年の間、何卒憐れみをもってこの設立願の通り、許可願いたく、株主総代が連署で恐れながらお願い申し上げます。以上

揖取群馬県令殿

このあとに連名があり、須田又八郎（修氏の父君）の名もある。書類の最後には楫取（かとり）素彦群馬県令による毛筆のサインがある。

書面願の旨意、精実（誠実）相違なし。これにつき奥印仕り候うなり。
区長　根井弥七郎
書面の趣は追而（追って）一般の会社条例制定あい成るまでは人民相対（あいたい）に任せ候うこと
明治十一年十二月二日（県令印）



「設立順」最終ページにある揖取群馬県令のサイン

これに対して、以下の連絡を受けた。

［金子より高槻へ、2016 年 7 月 27 日］
高槻先生
前略、「設立願」の解読、ありがとうございました。
原文は先生が先のメールで「味わいのある文章」であるとおっしゃっておられましたが、私には原文を読み下すことすらできませんでした。
先生の解読を読ませて頂き、漢文調で分からないなりにも、文章の流れがなだらかで感動すら伝わります。その上、現代文に解釈してくださったのを読ませて頂くと願主たちの誠意が伝わる文章と思いました。当時の公式書類は、味わいある文章で請願していたのかと感動ものでした。現代と異なり、それなりの徳を供えた人々が日本を引っ張って居たのでしょうか。その末席に先祖がいたことを誇りに思わなくてはいけませんね。
お送りさせて頂いて、ほんとによかったです。篤く御礼申し上げます。

これに対して同日、以下の返事を書いた。

［高槻より金子へ、2016 年 7 月 27 日］

金子様

喜んでいただけて何よりです。明治人の、私(わたくし)よりも公(おおやけ)を重んじる気持ち、またこの場合は愛郷心が伝わるように思います。当時のことを想像すると、そもそも公式文書を書くとはどういうことかがわからない人ばかりだったはずです。江戸時代の農民の嘆願書などはありますが、そうした文書に一定のパターンがあったのかもしれません。いずれにしても、この文書には、形式を超えた強い願いがあり、心の伝わる味わいがあります。その思いを表現するにはどうすればよいかを、あれこれ話しあい、文章が書ける人も限られていたでしょうから、思いを伝えて書いてもらい、それが自分らの気持ちを伝えているか、議論したものと推察されます。

揖取の文は事務的ですが、書はすばらしいものです。その前の区長の言葉は「趣旨は誠実に相違ない」と、現代の事務書類の無味乾燥、あるいは言葉だけが上滑りするような紋切り型の文とはまったく違い、心が伝わるものです。

それにしても松蔭と関わりの深い楫取(かとり)素彦県令の直筆に接すると、この書類が幕末を経て近代化に突入した激動の時代の息吹を伝えるものと思え、胸の高鳴りを覚えずにはいられません。

ところで、金子さんからの連絡に、獣医医療器具を入れた菓子箱の中に「夢馬記」という小冊子があったので遺品に加えたとあった。須田氏の愛読書であったと思われるので、これを読み、大意を下読して連絡した。ここにはその抄訳を示す。

「夢馬記」（抄訳）

東京は今年旱魃で、カラスが土煙の上る無風の空を飛んでいる。ある日、腰掛けで夕涼みをして月を見ていたら、うたた寝をしてしまった。客があるというので見ると、顔の長い、目の大きい、ぼさぼさの髪をした者がいる。名を問うと「馬です」という。「何しに来たのだ」と聞くと、「先生は馬のことをよくご存知だというので、四里を遠いとも思わず来たのです。私の話を聞いてください」という。

「馬は六畜のなかでも一番として、世界中で大いに厚遇を受けています。ところが私たちの先祖である斑駒は日本に渡来しましたが、その冷遇ぶりはまことに耐えられないものがあります。

昔から、私たち同朋には功名を博して、後世に伝えられるのはごく一部で、残りの大半は死んで谷間に捨てられてキツネやタヌキに食べられる始末です。重荷に耐え、険しい山を登るのはつらいものだし、でこぼこの土地を疾走すれば、肺がつぶれるほどです。

このような艱難辛苦は宿世の因果だとあきらめ、口にはしませんが、粗暴野蛮な人間が、畜生はものを言わぬことをよいことに、ろくに食べ物も与えないで、無非道な所業をします。なぜ私たち畜生が人間のために苦慮しないといけないのでしょうか。

私たちに文句を言う者いわく「この馬は口向が悪い」、いわく「ひっかける癖がある」、いわく「体格がよくない」と、悪口だらけです。

先生を訪れたのは、最近、馬の品種改良などと理解に苦しむことが言われているからです。先生、教えてください」というので私は答えた。

「我が国の馬は体が小さく、性質が遅鈍で、スピードがなく、持久力が乏しい。もし外国に事あらば、わが軍隊はどうして敵と戦えるだろうか。だから急いで雑種を作らなければいけないのだ。」

馬が言った。

「先生、私たちの祖先はそもそも外国種であって、私もまた雑種なのです。体が小さい騎兵は大きな馬には乗れません。馬を扱う技術のない騎手は馬を制することはできません。愛畜の心のないものは馬を保養することはできません。体格、駆術、愛畜の三つが備わっていなければならないのに、そういう人はいません。今日の急務は、馬種改良ではなく人の改良です。」

そう言うと馬は大喝し、蹄塵をあげて走り去った。

夢が覚めれば辺りはすでに寂しくなり、残月が輝き、涼しくなっていた。

［高槻より金子へ、2016 年 7 月 29 日］

金子様

「夢馬記」は最初、他愛のないエッセーだと思って

読み始めたのですが、なかなかおもしろく、最後は読後感の余韻にひたりました。というのは、背景は当時の軍馬改良が進められていた時代で、深刻な内容なのですが、設定がうたた寝の夢に馬がでてきたものとしていたからです。その中で馬に言いたいことを語らせるという形をとっているために、深刻な話題がユーモラスになっています。実は私は昨年「となりの野生動物」という本を書いたのですが、そのなかでまったく同じ試みをしました。たとえばアライグマは少しやんちゃなお兄さん風にして、「俺たちは好んで日本にきたわけじゃない。アニメで俺たちの子供が人気がでて、ペットみたいに輸入され、大きくなって手に負えなくなったら、野外に放しちまった。もともと野生動物だから野外で生きるのは平気で、そこで生きていたら、けしからんといって駆除しやがる。だったらはじめから日本になんかつれて来るなってんだ」という具合で、いろいろな動物に語らせました。言いたいことは人間の身勝手さを見直そうということです。「夢馬記」の著者も人間の身勝手さをとらえています。しかも、ただの感想ではなく、自分たちの祖先が伊達政宗によって輸入され、その遺骨も残っていると博学ぶりを披瀝し、そもそも雑種であるのに、純血種を改良するかの如き姿勢を批判し、返す刀で、おかしいのは騎手が技術もなく、馬のことを知りもしないくせに、馬が悪いというのは理不尽だと指摘します。そして、改良すべきは人間のほうだと、大いに説得力のあることを言います。時代背景を考えると、国策を批判することにもつながりかねない危険なことですから、馬が夢にでてきて語ったという形をとることで緩衝効果を狙ったものと思われます。これが須田修氏の遺品に入れられたということは、愛読書であったと思われ、馬を心から好きだったと察せられます。

これに対して返事が来た。

［金子より高槻へ、2016 年 7 月 31 日］

高槻先生

『夢馬記』は医療器具の入っていた菓子箱の底にありました。直接、医療機器ではないので、送付を躊躇したのですが、送ってよかったです。先生の口語訳をまだ、一読させて頂いただけの感想ですが、大げさな言い回しをお許しいただけましたら祖父にとっては、座右の書に近い何かを感じていたのでしょうか。密かに菓子箱に忍ばせたそれを読み解いてくれた人物が現れてくれたのを喜んでいると思います。

7 月 29 日に新規収蔵展示を整え、報告した。

［高槻より金子へ 2016 年 7 月 29 日］

金子様

本日、須田展示を準備しました。作業中にお便りを拝受し、拝読しました。たいへんうれしく存じました。私は理系か文系かわからず、どちらにも興味があり、とくに明治人の精神などは大好きです。展示の準備が整いましたので、上京される機会があればぜひお運びください。

展示のようすやポスターを添付します。こうしたデ

展示のようす（左）と展示物

ポスター

ザインも楽しんでいます。

同日以下のお礼の返事があった。

［金子より高槻へ、2016 年 7 月 29 日］

高槻先生

須田修の展示コーナーのデザインを拝見させて頂きました。先生、レイアウトも守備範囲のようで、恐れ入りました。ポスターまでご用意くださいまして、立派な展示コーナーを頂いて、恐縮でございます。

全てをプリントアウトし、来月半ば、足音も立てずに帰る祖父母や両親の仏前に報告させて頂きます。90 余年もの間、埃を被り、暗闇に置かれた遺品たちが高槻先生のお骨折りで、息を吹き返し、何やら誇らしそうにさえ見えて参りました。

ポスターのデザインで、鮮やかなブルーを背景に立つ「秤」の写真は、地味な古色の遺品を際立たせ、息をのむ美しさに打たれ、思わず、パソコン画面がぼやけてしまいました。

ありがとうございました。心より御礼を申し上げます。

高槻による付記

創立以来 125 年以上を経過したことを考えれば、古い世代の卒業生には物故者も増えており、その遺品の価値や意義が理解されないまま処分されつつあることが懸念される。こうした状況を考えると、その確保、収蔵は急務であろう。今回、金子氏のご理解、ご協力により、非常に価値の高いご遺品をご寄贈いただけたことは本学にとって大きな幸運であった。これがよい例として周知され、同様の事例が増えることを期待したい。この記録では公表されることを想定しない文通の一部を公表することとなった。そのことをご快諾いただいた金子倫子氏に深く感謝したい。氏との交流は麻布の同窓でないもの同士のそれであったにもかかわらず、深い共有感を抱くことができた。これは麻布という存在と故人の人徳のおかげであったとの感が深い。このような交流ができたことは実に楽しく、まことに幸運なことであった。

謝辞

「赤城産馬会社設立願」の読み下しについては小平市教育委員長関口徹夫氏と同市中央図書館の蛭田廣一氏にお世話になりました。篤く御礼申し上げます。ただし大意現代語訳は高槻の解釈によるものです。英文摘要は麻布大学の P. Collins 先生に目を通していただきました。

資料１

赤城産馬会社設立願

当上毛ノ地タル高嶽西北ニ位シ水流ハ東南ニ連環シ麓野
芳草ニ富メリ則牧畜ヲ興起セザルベカラズ故ニ上古七八ノ牧場
アリト雖トモ廃絶年久シ当御管庁篤ク人民ニ教示シ各所ニ
牧場ヲ復古セシム既ニ赤城牧場ニ洋和牛数頭ヲ飼養シ茲ニ
二年ノ産出ハ六拾余頭ト聞ク盛ナリト謂ベシ吾曹モ又協同
熟儀シテ胴察スルニ　当御管下拾四郡ハ従来農馬ニ乏シキ国
ニシテ連年奥羽ヨリ牛馬売買渡世ノ者幾千疋トナク購求シ
亦諸国ヨリ直チニ県下ノ市場ニ牽来テ商儀ヲ興シ販売
成ト雖トモ元来乏馬ノ邑邦ナレハ中々毎戸ニ渉ルコトヲ不得
如何トナレバ牝牡牛高値諸費ニ煩エ貧民何程購求
ヲ望ト雖トモ其意ヲ不得永遠家産ヲ振起スルコト難シ
終ニハ良田圃モ又悪地ト変シ随テ不良ノ稲菽麦ヲ耕シ
実ニ御国益ハ日益ニ衰エ桑茶モ又如斯誠ニ小民憫然
ノ至リ付少金以大金ニ換ラシメンニハ産馬規則ニ照シ三ケ年
賦ヲ以テ牝馬貸付置其生産ノ牝牡ヲ以テ田圃ヲ耕耘シ
貨物ヲ運搬シ人民ノ労力ヲ助ケ将来各家ニ数頭ノ農
馬ヲ飼養スルニ至ラバ富国ノ基ラナン依テ生産ニ注意シ強テ
尾太繁盛ヲ不朽ニ仰キ同盟此社ヲ盛大ニ尽力シ良馬ヲ
分娩セシメ人世日用ニ供シ単ニ協同戮力シ以テ十年ノ
光陰ヲ渉リ良馬蕃殖仕リ御国益ノ一端ニモ奏度
候間何卒　御仁恤ヲ以願ノ通御許可被成下置度
株主惣代連署ヲ以恐惶奉懇願候以上

区長　根井弥七郎㊞

書面願之旨意精実相違
無之ニ付奥印仕候也

書面之趣ハ追而一般ノ会社
条例制定相成迄ハ人民相対
ニ任セ候事
明治十一年十二月二日㊞

資料２

「夢馬記」（大意現代語訳　高槻成紀）

明治 27 年　馬僧

東京は今年旱魃で、カラスが土煙の上る無風の空を飛んでいる。ある日、腰掛けで夕涼みをして月を見ていたら、うたた寝をしてしまった。客があるというので見ると、顔の長い、目の大きい、ぼさぼさの髪をして、尻尾をひき、体が高く、脚の長いものがいる。名を問うと「馬です」という。「何しに来たのだ」と聞くと、「先生は馬のことをよくご存知だというので、四里を遠いとも思わず来たのです。私の悲しい話を聞いてください」という。

「馬は六畜のなかでも一番として、昔から動物界で最高の地位をしめ、アラビアなどでは神と尊ばれ、英米などの強国では大いに重視されて厚遇を受けています。ところが私たちの先祖である斑駒は日本に渡来し、一時減りましたが、今は増えて百二十万頭にも達しました。それはめでたいことなのですが、その冷遇ぶりはまことに耐えられないものがあります。先生、ぜひお考えください。

昔から、私たち同朋には功名を博して、後世に伝えられるのは、池月、磨墨、権太栗毛、大夫黒膝衝栗毛などだけで、残りの大半は死んで谷間に捨てられてキツネやタヌキに食べられるという状況です。重荷を背負えば背は曲がり、脚は折れるほどですし、重車を曳いて険しい山を登れば、後ろに引かれて落ちることもあるし、前に押されてつんのめることもあります。あるいは騎手をのせて、でこぼこの土地を疾走すれば、肺が疲れて絶倒することもあります。

このような艱難辛苦は宿世の因果だとあきらめ、口にはしませんが、粗暴野蛮な人間が自分の無知を顧みず、私たちを過酷に取り扱い、畜生はものを言わないもの

だから、ろくに食べ物も与えないで、無非道な所業をして配慮がありません。それでも、がまんして命令に沿うようにして長いあいだ鞭撻のもとに服役してきたのですが、報酬として屠場という極楽浄土に回され、今や泣いても笑っても、屠斧のもとに往生をとげるしかありません。生者必滅の梵語を味わえば、それほど嘆くことではないのかもしれません。そうではありますが、造化の万物が生まれれば、そのあいだに無用な偏りはないはずです。なぜ私たち畜生が人間のために苦慮しないといけないのでしょうか。なぜ人間だけがわがまま勝手な振る舞いをするのでしょうか。

とにかく不幸なのは馬です。私たちに文句を言う者いわく「この馬は口向が悪い」、いわく「ひっかける癖がある」、いわく「前が弱い」、いわく、「跪(つまず)く馬だ」、いわく「踏み込みが悪い」、いわく「体が小さい」、いわく「体格がよくない」、いわく「もともと病気持ちだ」と、悪口だらけです。これはつまり自分が馬を扱う技術が未熟であることをわかっておらず、ただ馬は口がきけないものと思い込んでいる迷誤者のことばです。

家畜のなかで馬ほど素直なものはいません。素直だからこそ、人間の行為にしたがって、ちょっと手を強く引けばたちまち片口になるし、ちょっと脚をうまく使えば蟹行(かいこう)（横歩き）もできます。にもかかわらず、自分の手癖足癖で馬を曲げていることを忘れ、「こいつは口向き不良だ」とか、「こいつは退却する癖がある」などはもってのほかです。

そういうわけで私はもう我慢がなりません。もう蹄を揃えて敵に背き、人間を蹴って目にもの見せてくれようと思うのですが、ここが堪忍。人間にも賢い人と愚かな人があります。必ず私を見ることのできる賢明な人がいるでしょう。まず徃（不明）を試しにこれを説いて、そののち、旗鼓を見ても（註 1）遅くはないと衆議一決しました。

ここに先生を訪れたのは、最近、馬の品種改良などとしきりにかしましく言っていますが、私はなんとも理解に苦しむからです。先生、教えてください」という。

そこで私は答えた。

「我が国の馬は体が小さく、性質が遅鈍で、胸が狭く、腹が太く、胴長で、四肢は短く、腰の接合が悪く、垂直がよくなくて、筋骨が痩せ、蹄がよくなくて変形しやすく、歩幅が狭く、スピードが悍威少なく、持久力が乏しく、このため調教がうまくいかないので、処分するものが多い。もし外国に事あらば、わが軍隊はどうして敵と戦えるだろうか。これが現在外国馬を輸入して急いで雑種を作らなければいけないという理由である。」

馬が言った。

「先生の言われることは正しいのですが、日本馬の今置かれた状況はその原因があるからに違いありません。その原因を明らかにすることなく一概に改良を望むのは、譬えていえば、黄河が清くなるのをまっていても百年経っても効果がないのと同じだと断じて疑いません。どうかお願いです、一こと言わせてください。先生、今雑種を作ろうという説がありますが、私はわかりません。というのは、私たちの祖先はすでに外国種であって、私もまた雑種なのです。もし私を見て日本固有の馬という者がいたら、それは物事をわきまえない馬鹿者のことばです。陸奥の国の歴史を見てください。私たちの祖先は伊達政宗公に誘致されて遠く彼爾斯（不明）より来て、大いに雑種を作り、力があります。その遺骸はいまでも三戸の東の小さな社の下にあります。つまり私たちの祖先は外国馬であり、私たちはその後裔であることは疑う余地がありません。ところがこの貴重な旧系を排斥して新種族を迎えるのは日本人の軽薄さであり、実に嘆かわしいことです。雑種を作ること自体は悪くありません。しかしそれだけで、保護し、発揚する道を準備しないのは、卵を孵化させる技術を知らないのと同じで、それでは成長を期待することはできません。まして今の日本では雑種が必要であることさえ気づいていないのですから、なおさらです。体が小さい騎兵は大きな馬には乗れません。馬を扱う技術のない騎手は鋭敏な馬を制することはできません。愛畜の心のないものは貴種の馬を保養することはできません。体格、駆術、愛畜という三つのものがそなわってはじめて雑種を作ることができるはずですが、いまだに遅れています。旧来の馬の中にも、見るべきものがあるのだから、なおさらです。そういう訳ですから。私の見るところ、今日の急務は、馬種改良ではなく、騎兵の改良であり、御者の改良であり、飼養の改良であり、いや寧口人種（註 2）の改良です。」

（そう言うと）馬は大喝し、蹄塵をあげて走り去った。

夢が覚めれば辺りはすでに寂しくなり、残月が輝き、涼しくなっていた。

註 1　「旗鼓の間に相見ゆ」とは戦場で敵味方になって相会すること

註 2　口先だけの人という意味らしい